

〔論文〕

新たな認識論理の構築 18

—2視点はさみ込み 内的唯物論から見る心身論—

鈴木 啓 司

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

「新たな認識論理の構築」シリーズの第18篇である。「モノそのものであるコト」の表現を目指す内的唯物論は当然、心身論、すなわち、「心とは何ぞや」という人類積年の問いに向き合う必要がある。本篇は、その現時点での一応の解答である。その方法は、数学、物理といった、「モノ」を説明するのに有効とされている形式言語を、筆者のこれまで提示してきた認識図に読み込み、再解釈し、「心」なるものを語ろうとすることにある。具体的には、これまでの1視点囲い込みモデルから2視点はさみ込みモデルへの転換である。その結論はやはり言語表現の問題に帰し、「心」も「私」も「モノそのものであるコト」の表現しがたさにおいて「コップ」となれば変わらない、モノ世界において何も特別な存在ではない、というのが筆者の本篇での見解である。

キーワード：内的唯物論，心身論，2視点はさみ込み，1視点囲い込み

Building a new epistemic logic 18

—Sandwiching between two points of views “Mind” viewed from the interior materialism—

Keiji SUZUKI

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

緒言

本篇は「新たなる認識論理の構築」シリーズの第18篇に当たる。思えば、共有知識の形式化を目指すことから始まり、「モノそのものであるコト」を表現せんとする内的唯物論に至るまで、われながらいぶん発展成長（紆余曲折？）してきたものだ。もちろん、初期の目標は忘れていないし、基本路線は同じであり、それらはいずれ内的唯物論の中で最終形を与えられるものと信じている。だが、唯物論を名の限りは、ここで哲学の一大テーマ「心身論」に関わらないわけにはいかないであろう。むしろ、「心」とは何ぞや、という問いに答えることこそが、すべての問題解決に至る道とってよいかもしれない。そこで当論文では、この積年のアポリアに内的唯物論の立場から一応の解答を提示せんと試みる。

内的唯物論（新物質主義とも呼んだが、こちらの方がより内容を表明しているので、以後この名称を用いる）の基本姿勢を改めて確認しておこう。「モノそのものであるコト」の表現を目指す内的唯物論は、要はすべて言語の問題であると考え。もっぱら外から対象を描くことを基本機能とする言語は、「モノそのものであるコト」を表現することが限りなく苦手であるといってよい。世界を精密詳細に描写してくれる科学にしても、コップというモノ、犬というモノ、人間というモノを微に入り細を穿って説明してくれるが、「このコップであるコト」、「あの犬であるコト」、「私という人間であるコト」については何ら教えてくれない。コップや犬はそれになってみなければ分からないという言い訳が立つだろうが（いわゆる「コップになった“気分”」である。私たちはこのように、無生物に対しても「モノそのものであるコト」を表すのに、心的表現をついつい使ってしまう）、「私」は私自身である。「私」であること、その内面はいくらでも描けるはずだし、それはとりもなおさず、今私が感得しつつあるこの世界であろう。事実、哲学も科学も、まずこの「私」に映った世界を描写することに邁進してきたといってよい。ではなぜ、いくらこの世界を描いても描いても、「私」を描ききったという充足感が得られないのであろうか。それは、上に触れた言語の特性によるものである。言語は私の内面世界を描くやいなや、「描かれる外」と「描く内」を乖離させ、後者を手前（こちら）に残し（あるいは作り）続ける。この「内」を、私たちは自分を取り巻く物質世界に対してそれとは違う“ところ”として、扱ってきたのであろう。そして、今度はそれを外部世界に投影して、物質世界ならざる精神世界なる次元を想像したものとされる。結局、“物質というモノ”は描けても、“物質であるコト”は描けていないのである。そうした意味で、（心以前に）私たちはまだまだ物質を極めたとはいえないのであり、ここは謙虚に物質に立ち返るべきである。余計なものを持ち込まず、まだ極めていない物質から“ところ”を説明できれば、論理的にもコストパフォーマンスがよい（いわゆるオッカムの剃刀である）。とはいえ、従来の“外的唯物論”では限界があることは目に見えている。今後いかに脳科学が進歩しようと、全人類を納得させる心の定義を提出することはできまいと、筆者は思っている。重要なのは表現手段であり、その対象である「モノそのものであるコト」を何とか学問的（宗教的でも芸術的でもなく）言語に近いものに乗せようという試みが、筆者のいう内的唯物論である¹⁾。

基本三角図

筆者はここ数篇の論文で、「私」という「モノそのものであるコト」、端的にいえば“意識”の特性を局所性であるとし、生物の神経ネットワーク内の「あちら」と「こちら」意識から始まり、その往還の交叉点に立ちあがる私たちの「自己意識」に至るまでの過程を論じてきた。そして前篇²⁾では、相対性理論を借りて、神経ネットワークが光にブレーキをかけてその内部に局所性の表れである時間感覚を生じさせる、といったことを述べた。こうしてみると、ずいぶんと“外的唯物論”の言い回しに寄りかかっているようで、内的唯物論の立場からは矛盾するように思われるかもしれないが、そんなことはない。先に触れたように、外的唯物論の説く世界も私たちの内的状態なのであって、内的唯物論はそれをも取り込む言説であらねばならないのである。その在り方を前篇では、内と外の区別のない幾何学形体クラインの壺にたとえたわけだが、内的唯物論の論理展開も当然そうした内と外の往還のごとき運動を描くことになる。そのあたりのことを、すでに何度か掲げてきた下の基本三角図(とこれからは呼ぶことにする)で確かめておきたい。これが(あくまで)現時点における完成形で、これにより筆者は、意識における外部世界と内部世界の重なり具合をほぼ説明しつくせると、不遜にも自負している。

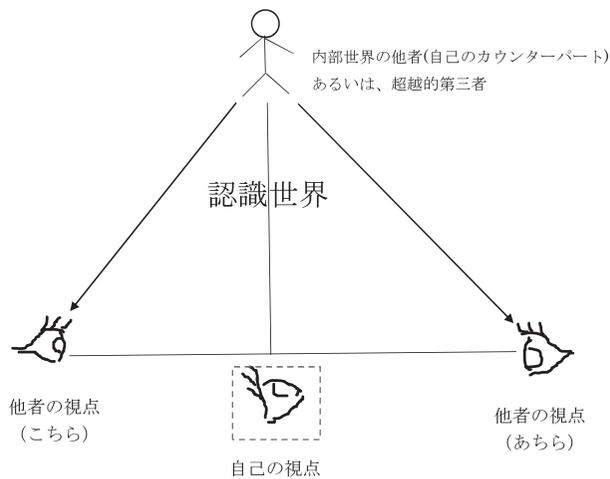


図1

左右の「あちら」と「こちら」の交叉点に結ぶ「自己」(図は2次元平面だが、この「自己」は前にせり出した、全体としては3次元三角錐と思ってもらいたい)、そしてその認識世界に立ち現れる、自己のカウンターパートである世界=他者、これらは意識の内部構造としてすでに触れてきたので、ここでは、物理学という外的唯物論をこの三角図にどう読み込めるかということ論じてゆきたい。そのあたりのことに踏み込めなかったために、従来の外的唯物論は「心」や「私」について不充足感を私たちに残し続けたと思うからだ。

「あちら」と「こちら」の交叉から生まれる「自己」意識に立ち現れる世界=他者は、自己意識を作っ

ている「あちら」と「こちら」のいわばアバターである。ゆえにそれは、自己意識にとって、自分に対峙するカウンターパートであると同時に、自分を作り出している根源、創造者のごとき超越的存在として映る。その視点から眺めた認識世界が、古典の世界像である。それは「あちら」と「こちら」を分け、両方を同時に見る、“局所性を全体的に見渡す”，いわゆる神の視点である。ただ、この視点は、自分の影、分身、というよりむしろ本体である「自己」は見ることができない。自分の顔を自分で直接見られないように。そのため従来の古典物理世界では、「私」の居場所がなかったのである。観測者は常に世界の外にあり、「あちら」と「こちら」を二つながら同時に見渡す超越者である。その典型がニュートン力学であろう。宇宙全体は神の目から見た絶対的慣性系として捉えられている。これに対し、アインシュタインの相対性理論では、三角形底辺の自己視点が視野に入り、宇宙は各観測者のいる慣性系の集合体と位置づけられる。古典物理学における認識論レベルでの最後の大いなる進歩である。とはいえ、まだその観測者の内部にまでは立ち入っていない。

その内部である「私」という自己視点は、自分を作っている「あちら」か「こちら」のどちらかしか一時に見られない。自分全体を見るということは、やはり自分の顔を自分で見るようなものだからだ。これが量子力学の世界である。そこでは、観測、観測者という概念が大きくクローズアップされ、理論の中に入り込んでくる。それはとりもなおさず、「見る私」である。そこに映るのは、「あちら」と「こちら」に局所的に分けられた全体ではなく、全体が「あちら」か「こちら」かどちらかしかでない非局所性である。何万光年離れても持続する量子の絡みあいとは、この認識の三角図に即して言えば、潜在的な「あちら」と「こちら」の視線の絡みあいであって、観測とは、両者の交叉点である自己視点がどちらに向くか(自己の向きを決定する)ということに当たる。そこに語られているのは、古典物理の「神の見るあちらとこちら」ではなく、「私の見るあちらかこちら」なのであり、より認識論的深部に近づいたといえるであろう。ただ、量子力学にしても、「見えた方」があちらになるのであり、「見えない方」のこちらは、モノの“内部”にとどまり続けるのである。

以上、大ざっぱに外的唯物論の世界像を認識の基本三角図に読み込んでみたのだが、外的唯物論をより内的唯物論の中にスムーズに取り込むには、後者のさらなる形式化が求められよう。そのキーコンセプトとなるのが、「2から1を作る」なのである。

2から1を作る

すでに基本三角図に見えるように、「2から1を作る」というのは、視点の問題である。根本にあるのは他者2視点モデルであり、従来の自己1視点モデルはその派生物に過ぎない。そのあたりのことを内的唯物論の中で自然に語れるように、形式化に腐心しつつ論じてゆこう。次に掲げるのも、筆者の論文ではおなじみの基本図である。

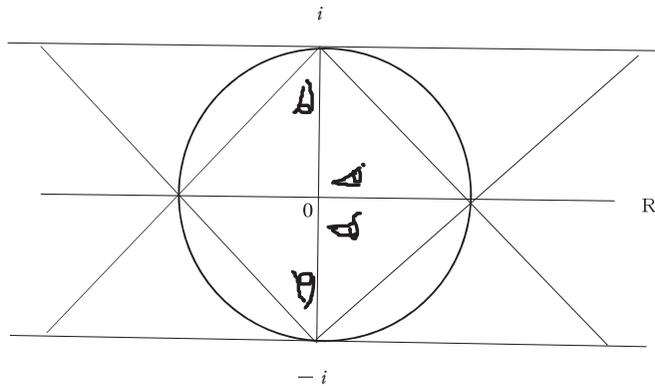


図2

これは、基本三角図の「あちら」と「こちら」を i と $-i$ に見立て、その交点「自己」を原点 0 とし、そこに映る世界を実数線で表した2視点はさみ込み数平面である。正負の実数は、 i 、 $-i$ それぞれから見た反転する世界である。これに対し、初めから原点 0 を中心に据えたのが、私たちがなじんでいる1視点囲い込み複素平面である。基盤である前者から後者へのシフトチェンジがいかになされるかという話をする前に、数学的に数を考える場合、2視点が必要であることをまず強調しておこう。それは「無限」を前にして顕著に表れる。無限を巡る集合論のパラドクスも、要は、1視点にとって可能な仮無限（永遠の囲い込み）に、実無限（決して囲い込めないもの）を持ち込もうとすることから生じる。考えてみてほしい、1視点から周りを囲い込んでゆく手法のどこに、すべてを囲いきったという充足感、達成感が生まれるであろう。それはどこまでいっても永遠の囲い込みである。そこで、完結した無限、実無限を語るために、2視点のはさみ込みというアイデアが認識論の立場から浮上してくる。基本三角図にある、「あちら」と「こちら」の交点に立ちあがる「自己」と、そのアバターである対峙者、さらにその発展形である、はるか彼方からやってくる超越的第三者との視線のはさみ込みが、実無限という概念を可能にしているのである。無限集合のパラドクスは、その境界を取り込んだ後の無限集合の境界を考えることができるか、というふうに翻訳できるが、囲い込み手法では、無限のその先はないため考えられないことになる。すると、無限集合の定義（境界とは集合の定義のようなものだ）自体が揺らぐ。はさみ込み手法なら、境界のはさみ込みで浮かび上がるものなので、どんな集合であれ（その時は集合という言葉をもう使わなくてもよいが）しっかり引けるのである。また、無限集合であれベキ集合が元の集合より大きくなることも、この2視点モデルから解釈できる。ベキ集合とは、ある集合のあらゆる部分集合の集合（数式では、その集合の要素数の2の累乗）であるが、それは換言すれば、各要素が各部分集合に含まれているか否かの全ケースということである。いわば、要素 a が存在する世界としない世界の反転関係である。これはまさに、裏から見る対峙視線に映る世界の存在を想起させるであろう。1視点で囲い込む集合が無限であろうが、そのベキ集合がさらに大きな無限となるのは、1視点の向こうからやってくる対峙視線を表しているからなのである。

この認識の2視点基本モデルが、おそらく生物的自己保存の要請から、日常では1視点自己モードに変換されるのであろう。そのシフトチェンジの過程を図で追ってみよう。図2の対峙する二つの視線は円を一周し（視線としては180度回転し）、潜在的にはさみ込み線を超えてまた180度回転し、都合360度回転で元に戻ってくるとみることができる（前稿で触れたように、認識レベルでは、視線自体は円を2周しているのだ）。それはまた、逆回転する対峙視線で元に戻ると見てもよい。いずれにせよ、その360度回転をすべて図示すると、1視点囲い込み複素平面となる。2視点はさみ込み複素平面は次図のように、複素平面にマイクロの形で埋め込まれているのだ。

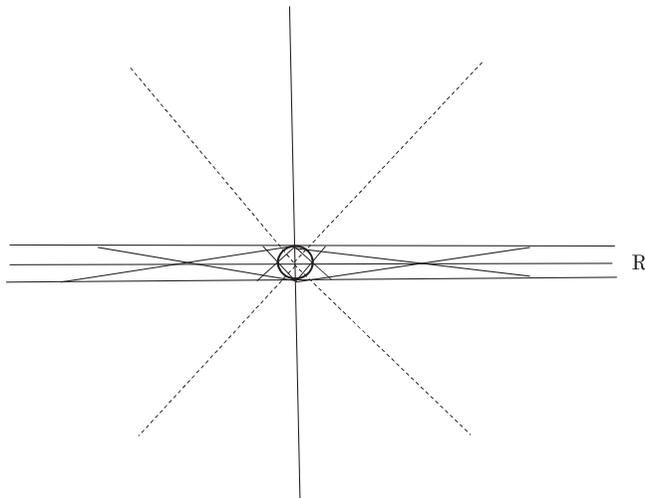


図3

ここから、新たな数体系の可能性が考えられる。通常の原因0は実は点ではなく、その周りにマイクロの円を描いている、幅のあるものだというわけである。そこで、0にも+と-の記号を用意する。はさみ込みの2視線は対峙点が0点であればぶつかり合っただけで動かなくなるが、そこには直径-0から+0のマイクロの円があって、それにそって同方向視線（1視点）の表現である正の実数線を90度で右に紡ぎ出し、その視線がさらにマイクロ円にそって回転して360度円を描き出す。これが、2視点はさみ込みモデルから1視点囲い込みモデルへのシフトチェンジの動力源となっているのである（図4参照）。

-0と+0を加えた数体系の本格的構築については将来の課題にするとし³⁾、ここではとりあえず、この概念によりどんな新しい見方が数学にもたらされるか示唆しておこう。根本となるのは、この二つをどのような数として捉えるかである。認識数論（とでも呼んでおこう）では、それをすべての実数をはさむ数と見なす。すなわち、各実数はことごとく-0と+0に両側をはさまれているのだ。ちょうど、「あちら」と「こちら」の両視線の交差が実数線という自己視線を生み出したように。これはいわば、新しい「無限小」概念である。それでは実数の連続性はどうか保証されるのだ、という疑問が湧いてこよう。ここでまた、分かりやすく図で説明する。筆者は以前、実数階段という概念を提唱し

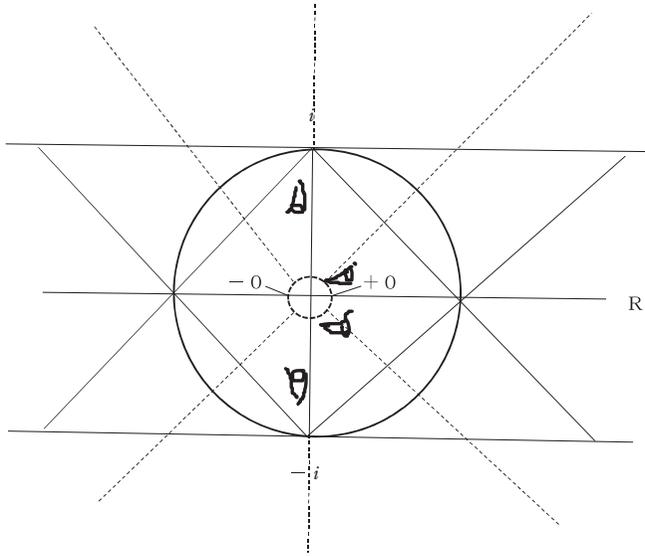


図4

実数階段

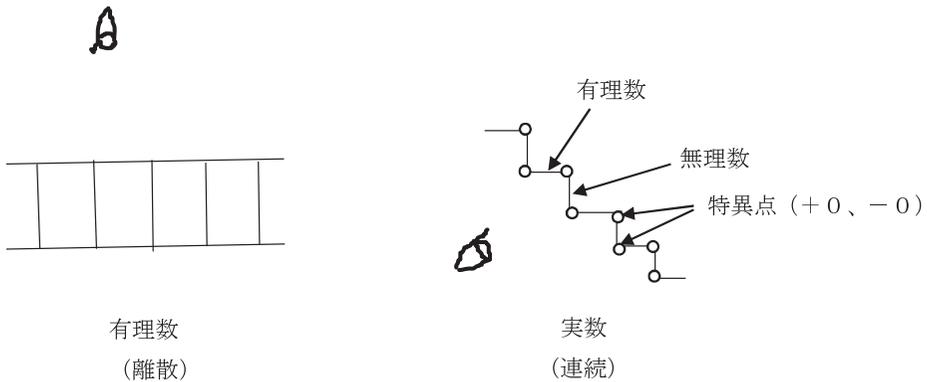


図5

た⁴⁾。階段というのは、有理数の離散性と実数の連続性を同時に示す格好のイメージだ (図5参照)。上、横と、ここにも90度差の視点関わっている。横図のこちらからの眺めをあちらから見れば、+、-の反転した階段が現れるわけだ。この階段のどこに+0と-0は位置するのであろう。それは図に書き込んだ段の折りに目である。折りは直線のいわば特異点である。そこは何か特別な地点なのである。この二つの0は、有理数が見える上からの視点では一つに重なり従来の0となる。各区切り線0の間に実質的な幅はない。実数の見える横からの視点では、両者の間は連続的な幅を持ち、それが無理数となる。従来の見方では、一方を固定し極限值として幅を縮めてゆく手法で無理数が定義され

るが⁵⁾、どうしても離散と連続のアンチノミーは克服できたとはいえなかった。それは、静止(極限值)と変動(有理数の無限級数)、ひいては、前稿でも論じた、時点としての時間と流れとしての時間のアンチノミーに重なる。それが、 $+0$ と -0 の概念と実数階段のイメージのドッキングで、筆者の中では無理なくつながったように思えるのである。ちなみに、この階段を正面から見れば無理数が離散的に見える理屈になるが、それには条件がある。この無限に続く階段を下りきって振り返って初めてそれは可能だということだ。それが極限值としての無理数のイメージで⁶⁾、それは決して実際には到達できないが、基本三角図の超越的第三者の目で見据えられたゴールである。そこに向かって有理数の階段を下りてゆくのが、現実的な自己視点だ。実数線は両端から、有理数と無理数によってはさみ込まれているのである。いずれにしても、1視点モデルでは $+0$ と -0 は重なって一つの0に見える。このように、有限なる私たちにとっての、無限を背景にした数の“存在”は、「あちら」と「こちら」の視点のはさみ込みでのみ可能となるのである。

さて、 $+0$ と -0 がもれなく各実数をはさんでいるとして、問題は原点0をはさむ両者である。そこでは何がはさみ込まれているのか。“無”ははさみ込めない。それは視線の衝突であり、停止である。何かがあるのである。今回もまず図を掲げよう。

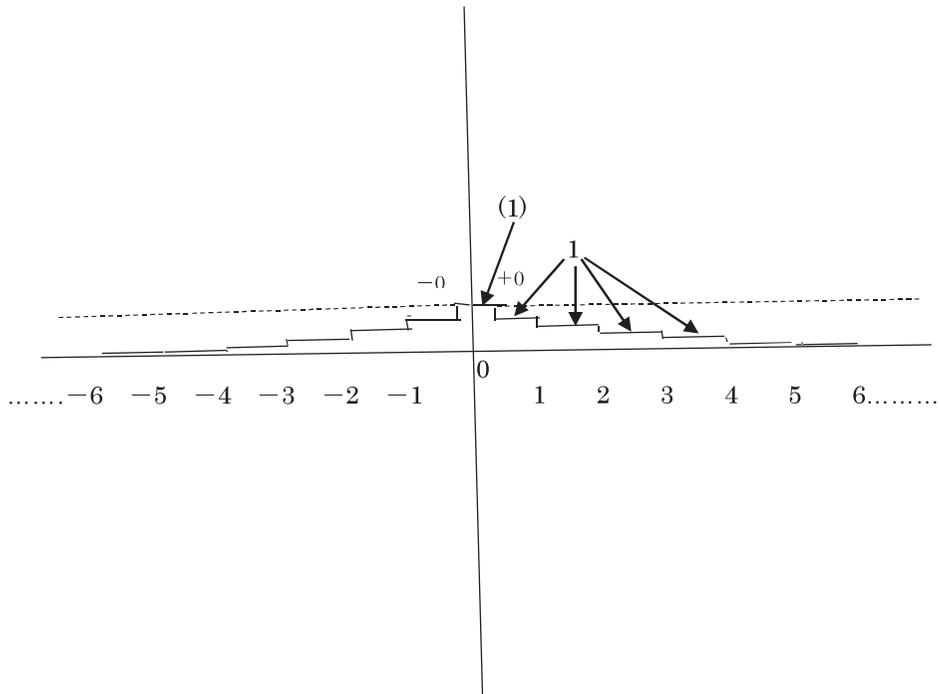


図6

分かりやすく自然数で階段を区切った。+、-の階段は、ちょうど原点0をまたぐ格好になっている。その幅は、そのほかの自然数の間隔である1ではなく、(1)となっている。これは、筆者がこれも何度も掲げてきた基本式、

$$1^0 + 1^1 + 1^2 + 1^3 + \dots = 1^n$$

.....

$$(1) \times (1) \times (1) \times (1) \times \dots = 1$$

の原初数といってよい(1)である。それが通常の1になる過程はすでに論じたが⁷⁾、(1)とは、+0と-0の幅とも定義できるわけである。

さらに想像力を膨らませると、原点0からの+、-の各幅は、従来の数学平面でいうと、1/2である。ここから、以前すでに試みたが⁸⁾、あのリーマン予想に思いを馳せるのは、飛躍のしすぎであろうか(多分そうだろう)。だが、2視点モデルから1視点モデルへの橋渡しとしての観点から見ると、そこにはなかなか興味深いものがあるのである。そこでお座興までに、両視点モデルのハイブリッド図で、リーマン予想を認識論的に解釈してみよう。その前に、ハイブリッドに関して一言補足しておく。ゼータ関数は最初、1以上の正の実数を定義域として確立されていたが、それがのちにオイラーによって複素数域にまで拡張された。その時、解析接続と呼ばれる手法によって1から0間、そして負数へと関数の領域が加えられていくのだが、その方向はお分かりの通り、右から左へというものだった。これに対し、以下の認識図では根源的な数の成り立ちに遡ってみた結果、左から右に領域はつながっている。

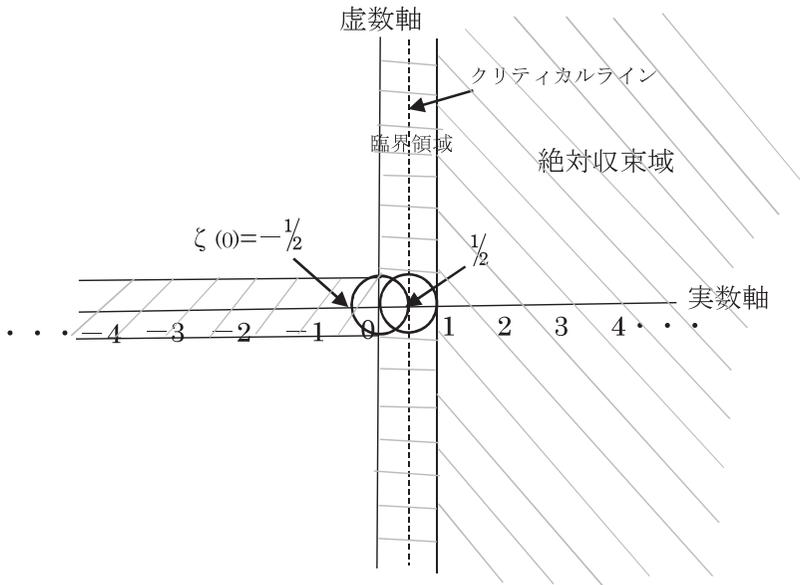


図7

図の左から2視点の交叉は、自己像を結ぶ対峙角度の180度に向かって進んでゆく。自己視点とは、そこに現れる原点0である。そして負の領域は、自己が生成されるまでの過程であり、ゼータ関数の自明の零点、 $-2n$ は、2視線交叉の原点0を先取的に反映している（と書いたが、より完成された完備ゼータ関数では、負の領域に零点はない。やはり自己が生成するのは、0から1の間の臨界領域においてなのだ）。そして、原点0を超えた右の領域は、自己成立後にそこに映る同方向視線世界像への入り口であり、1から先はゼータ関数の絶対収束領域である（ $\zeta(1)$ は ∞ に発散し、極といわれる）。しかし、対峙視線から同方向視線への転換は直角のような急角度でなされるのではない。そこには視線の回転幅がある。その0点のズレが、ゼータ関数の臨界線 $1/2$ として現れる⁹⁾。認識数論でいうと、原点0をまたぐ+0である（ちなみに、ゼータ関数に0を代入した $\zeta(0)$ の値は、 $-1/2$ であり、これは-0に相当すると考えられる）。自己を表す原点0の反映であるゼータ関数の零点は、正の領域では90度角度を変えて虚数軸であるこの臨界線上に乗ることになる。そして、実数線をはるか彼方まで見通すのである。それが素数の分布と関係しているといわれるが（それゆえリーマン予想は注目されるわけだ）、それについての認識論的解釈はまた稿を改めて考えてみたいと思う。とにもかくにも筆者には、リーマン予想は複素平面の深部にある数学の2視点モデルを垣間見せてくれるような気がして興味深いのである。

次元と視点

2視点モデルは次元を考えるうえでも有効である。なぜ、次元なのか。私たちが見ている世界は網膜という2次元平面（厳密には厚みがあるから3次元だが）に投射された映像だが、それを脳で3次元空間として受け取っている。そのメカニズムは脳生理学的にあれこれ説明できるだろうが、それらはいずれも1視点外的唯物論による外からの説明であり、「モノそのものであるコト」は語っていない。視点は表立つことはなく、対象の外面に暗黙裡に張り付いたままである。内的唯物論の立場からすると、どうしても物足りないのである。筆者は時々思うのだが、今私が見ているこの世界は網膜の表なのか裏なのか、と。それは、哲学的認識論のお決まりのテーマ、「世界は私の外なのか内なのか」の生理学バージョンといってよいかもしれない。この問いに答えてほしいのである。2視点内的唯物論で見るとこうなる。網膜という2次元平面をあちらとこちらから2視点ではさみ込む。それが平面に直交する第3の軸であり、これにより全体は3次元空間となる。私が見ている世界は網膜の裏でもあり表でもあるのだ。さらにそれを眼球という3次元体（脳、身体の換喩と取ってもらいたい）に拡張、また内（こちら）外（あちら）から2視点ではさみ込む。それが、私たちを取り巻くこの4次元時空（3次元空間+1次元時間）である。筆者は以前、時間は「あちら」と「こちら」の往還という局所性から生まれる感覚的なものと述べたが¹⁰⁾、それはここでいう2視点はさみ込みのことだったのである。私が見ている世界は、私の外でも内でもあるのだ（前稿で触れたクラインの壺構造）。ここから、2視点内的唯物論の次元の定義が導き出される。すなわち、次元とは2視点のはさみ込みである。点（0次元）ははさみ込みなし、線（1次元）は点と点とのはさみ込み、面（2次元）は線と線とのはさみ込み、といった具合に。それが、一般的には直交軸として形式化されているのだ。以上のことを、ま

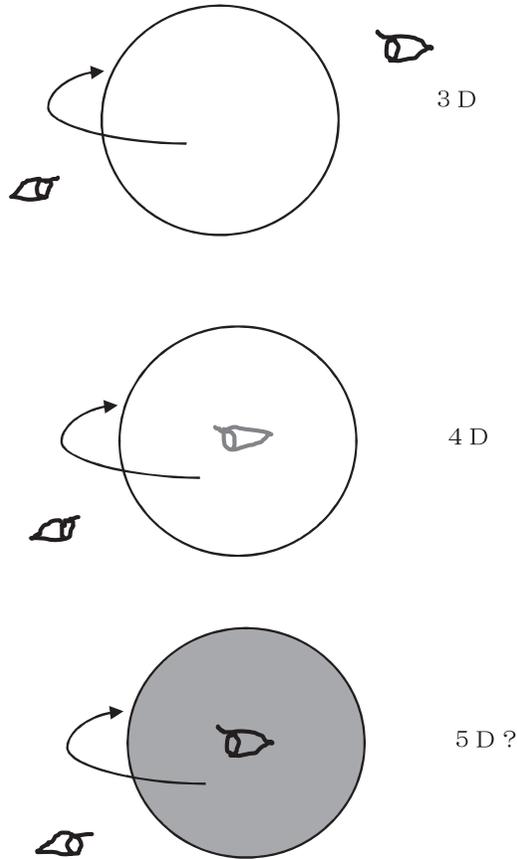


図8

たイメージ図を使って展開しよう。

n 次元+対峙2視点 (=次元) = $n+1$ 次元

矢印は2視点からそれぞれ見える方向を考える目安である(図だと、球が右回転か左回転か)。2視点はその次元空間内で交換可能である。2次元球面を2視点ではさみ込んだのが3次元空間である。ここでは球の回転方向は両視点にとって同じである。そして、その3次元空間を2視点ではさみ込んだのが4次元空間図である。ここでは、片方の視点は2次元球面が覆う3次元空間内に据えられていて、両視点に映る球の回転方向は互いに逆である。それは表と裏の視点を表わして、両者は3次元空間内では交換不可能である。ここまでは基本三角図から拡張展開できる話である。問題は5次元空間図である。これは本当に想像の域を出ないのであるが、4次元空間をはさみ込む2視点(4次元空間に埋め込まれた視点と、それを外から見る視点)は、中身の詰まった球体内部の視点を想定しなければならないのではないか。中身の詰まった球体内部の視点とは、果たしてどのようなものか。そこではもはや視点と対象ではなく、視点そのものが問われているといえよう。そしてそれはとりもなおさ

ず、「モノそのもの」である。これは、「モノそのものであるコト」の表現を目指す内的唯物論のその先にある課題であろう。それについてはまたゆっくり考えることにして、とりあえずは、その先を垣間見せることによって、内的唯物論による「モノそのものであるコト」の表現形態は一応の形を得たものと、筆者は納得している。

内的唯物論による心身論

最後に、内的唯物論による心身論の結論として、身体・言語・世界の位置関係を図示して説明しておこう。

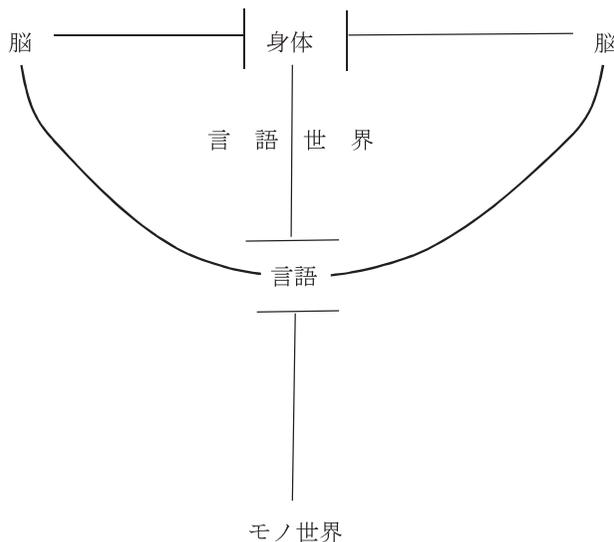


図9

一段目は、脳と脳の間を身体が隔てているという意味である。これについては、森田真生の『数学する身体』¹¹⁾で知ったラマチャンドランの『脳のなかの天使』¹²⁾に出てくる実験のエピソードを紹介したい。脳の共感力を説明するうえで多大な前進をもたらしたミラーニューロンが1996年に発見された。それは他者の運動を見るだけであたかも自分も運動しているかのごとく活性化するニューロンである。また「痛み」といった感覚をも模倣する。例えば、私たちは人が指をドアにはさんで痛がっている様を見て思わず顔をしかめる。だがその時、実際の痛みまでは感じない。それはなぜか。ラマチャンドランは、それは身体というセンサーから痛み信号が来ないため、脳はそれを「私の痛み」ではないと判断するからだと考えた。そしてそれを実証すべく実験をした。戦争負傷者で片腕を失い幻肢症状（腕がないにもかかわらず、ありありと腕の感覚を覚える幻覚症状）のある患者に、他人の腕が無でられたり叩かれたりする様を見せたのだ。すると予想通り、被験者はその感覚をありありと覚えるといった。つまり、腕という末端センサーがないため、そこからの無効信号（痛みがないという

信号) がこないで、脳内ではミラーニューロンの活性が実際の痛みと受け取られたのだ。健常体では、信号がないことが「今見ている痛みは私の痛みではない」という信号になっているのである。ラマチャンドランはいつている。「あなたの意識と別の誰かの意識を隔てている唯一のものは、あなたの皮膚かもしれないのだ！」¹³⁾と。こうした脳生理学からの見地に加え、筆者の基本三角図による自己の生成過程を踏まえると、筆者には、いわゆる「他我問題」(他者にも自分と同じ心があることをどうやって立証できるのか)なるものがどうもピンとこない。サルトルの対他存在にしてもそうだ(即自存在から対自存在への分析の鮮やかさに比べ、他者を論じる対他存在のキレ味の悪さは明らかである¹⁴⁾)。自己など初めから他者と絡みあっているのである。だが、そこに言語が加わることで、話はややこしくなる。一度言語化(システム化)されると、システムの出自(1視点が2視点から構成されていること)にシステム内から迫るのは容易ではないのである。

身体で隔てられた脳同士を形式的につなぐのが言語である。私たちは言語により、身体に閉じ込められた意思の疎通を図る。だがその言語は今度は、論文冒頭にも触れたように、“描くもの”、“描かれるもの”の乖離を生じさせ、身体とモノ世界を分断し独自の言語世界を形作る。その結果生じた“描くもの” = “描かれぬもの”を世界の中に残存させ続ける。いわば、「モノそのもの」から幽体離脱した「モノそのものであるコト」である。それが、身体=物質ならぬ「心」である。だが実は、図を見て分かるように、身体こそが「モノそのもの」としての、言語世界における描かれぬものなのである。ゆえに、言語が描くことの苦手なモノ世界に還るには、図から「言語」を取り払えばよい。

身体



モノ世界

図10

それを可能にしてくれるのが、禪の瞑想や現象学の判断中止(エポケー)といった非言語活動なのであろう。確かに、これら“一時的言語断ち”は「モノそのもの」の境地に還るのに有効であるかもしれない。だが、曲がりなりにも学問という言語活動に携わる者としては、いつまでも言語断ちするわけにはいかない。「モノそのもの」の手前であるにしても、「モノそのものであるコト」の言語表現

を目指す内的唯物論を今後も追求し続けるゆえんである。

結語

私たちは認識において、ずいぶんと言語の恩恵に浴しているが、根本的な勘違いもそこから被っている。その典型が「心」であり、そして「私」だ。「私」の唯一性、特殊性ということがよくいわれる。どうして「私」は「私」であり、他者ではないのか。「私」の内面だけがどうしてこうも“リアル”なのか。これらはいずれも言語がもたらした思い違いだ。次のように考えてみてほしい。今、1から1000までの数字を書いた1000枚のカードが目の前に伏せられていて、そこから無作為に1枚引くとする。もしそれが777だとしたら、あなたはどう思うだろう。ラッキーナンバー7のぞろ目で縁起がよい、といったところか。これに対し、561だったら。特に何とも思わないだろう。だが、数字はどれも平等に1/1000の確率で引かれるのである。777が特別と思われるのは、言語による意味付与が後付けでなされているからだ。私たちの生もこれと同じようなものだ。「生まれる」こと自体、「存在」としてはまったく同等である。だが、その後言語による意味付けがなされ違って見えてくる。天皇家に生まれる、一般庶民に生まれる、100年に一人の大天才として生まれる、凡人として生まれる。要は、言語による意味付け次第だ。こうして「私」は「私」になってゆく。この世界に存在するにあたり（何がとはいわない、いえない）、人間の脳神経ネットワークという形を取り、その内部状態である意識が持つ局所性という性質が言語と相まってここに形作ったのが「私」だ。そして、その周りに今度は世界が囲い込まれてゆく。それはあくまで言語が描き出すモノであるが、その言語にとって、「モノそのものであるコト」の表現困難さにおいて、「私」も「他者」も、さらには「コップ」もまったく同等である。神経ネットワークも死ねば、その内部状態はコップと同じもの（モノそのもの）であろうと予想される。その死を「私の死」として局所的に囲い込むのは、神経ネットワークの内部状態である意識と、それが駆使する言語のなせる業である。そう考えると、宇宙の実態は量子力学の説くように量子の絡みあいなのであって、そこに見られるモノという局所的な囲い込みは、神経ネットワークの内部状態である意識そのものといえよう。「心」も「私」もこのモノ世界において何ら特別なものではない、というのが筆者の見解である。

出発点の“共有知識の形式化の試み”から内的唯物論へと、本「新たな認識論理の構築」シリーズはずいぶんと哲学的発展を遂げてきたわけだが、ライトモチーフは一貫しているように思える。それは、“形のないものに何かしらの形を与える”ということだ。「モノそのものであるコト」を表現可能な言語というのは、本シリーズの初期段階で打ち出した、「何か知らないが知らないことがあることを知っている」という人間特有の知識の在り方を公理にした認識論理システムに通じるものがある。大切なのは、「モノそのもの」や「何か知らないが知らないこと」が何かではない。そのような内容の問題ではなく、そうした形のないものに形を与えるという、形式、表現の問題なのである。それにより、語りえぬものの内容を巡って形而上学の隘路に踏み迷っていた従来の思考、哲学のスタイルに、新たな地平が開けるのではないかと筆者は考えている。ちょうど、“無”に0という形を与えて数体

系に取り込み飛躍的に発展した数学のように。人間の認識メカニズムは何かそういう形ならざるものをバネに機能しているのである。よく、カントを含めた不可知論に対する批判として、認知不可能なものがあることをどうやって認知するのだ、という発言を聞くが、不可知なものを据えた知識の在り方が人間特有の認識形態なのであり、それがアプリアリなものなのだ（どうしてそうなったかという理由は、端的に言って、脳が発達し想像力を持ったからであろう。そこが人間と、「知っているモノを知っている」動物の違うところである）。モノ（物質）であるコト（精神）も、「知らない」ことを「知っている」も、言語的矛盾であり、形のないものである（「四角い丸」のように）。人間は言語を獲得した時からモノそのものを忘れてしまったといえる。ゆえに、その中身を云々することはできない（何しろ、言語を獲得することで忘れてしまったのだから）。だが、それを忘れてしまったことは知っている。このことに対し「沈黙」するのではなく、何かしらの学問的カタチを与えんとするのが、筆者の内的唯物論の試みである。宗教的でも芸術的でもなく学問的というのは、使う言葉がしっかりと定義できて、最低限の論理形式を守っているというぐらゐの意味である。それはどうしても従来の言語表現の枠に収まりきらず、イメージ図といった視覚的手段に訴えることの多かりきに通じるが、どのような形になるにせよ、いつかそうした学問的言語が完成するまで、この試みは続けてゆく所存である。

注

- 1) このシリーズを書き連ねる中、「モノそのものであるコト」に関心が向き始めたころ、やはり「モノそのもの」へのこだわりを顕示しているらしい「新しい唯物論」、「思弁的实在論」、「真の物理主義」といった流行り（？）の思潮の話がちらほら耳に入ってきてはいた。ただ、変に影響されたくなくて意識的に遠ざけていたが、結局は気になるので、このたび一部を覗いてみた。参考にした本は以下のものである。

- Quentin Meillassoux, *Après la finitude, —Essai sur la nécessité de la contingence*, Seuil, 2012. 日本版 カンタン・メイヤスー、『有限性の後で —偶然性の必然性についての試論』、千葉雅也、大橋完太郎、星野太訳、人文書院、2016.
- Graham Harman, *Towards speculative realism*, Zero books, 2010.
- *The speculative turn, —Continental materialism and realism*, edited by Levi Bryant, Nick Srnicek and Graham Harman, re.press, 2011.
- Galen Strawson, *Real materialism*, Oxford, 2008.
- グレアム・ハーマン、『四方対象 —オブジェクト指向存在論入門』、岡嶋隆佑監訳、山下智弘、鈴木優花、石井雅巳訳、人文書院、2017.
- グレアム・ハーマン、『思弁的实在論入門』、上尾真道、森元齋訳、人文書院、2020.
- 『現代思想6 特集—新しい唯物論』、青土社、2015.
- 『現代思想6 特集—汎心論』、青土社、2020.

読んでみて、筆者の路線とはかなり違うので安心したし、また、支持、参考となる言が得られないということでは、失望もした。要は、カント以来哲学に定着した、認識主体—対象の図式を脱し、対象の「モノそのもの」性に迫ろうという動きと捉えられるが、筆者には正直、どこが新しく、何が面白いのか、よく分からなかった。他人の思想を注釈することには情熱が湧かないので、一言だけ不満を述べるにとどめれば、彼らのもっぱら対

象の「モノそのもの」性を問題にしている、「私」の「モノそのもの」性をほとんど顧みない。それに対し、彼らが一番のやり玉に挙げるカントは、『実践理性批判』において、その問題を視野に入れていたのではなかったか。案の定、彼らのカント批判は、主に『純粹理性批判』に集中し、『実践理性批判』はまったくといっていいほど話題に上らない。これでは“批判”も片手落ちであろう。結局、彼らのいう「モノそのもの」とは、手前みそになるが、「モノそのものであるコト」の言語表現の問題に帰着すると考える。少なくとも、筆者は彼らの著作を読んで、「モノそのもの」が見えてきた気はしない。本文にも書いたが、求められるべきは、「モノそのもの」が何かではなく、もともとあるその言語の空白地帯にカタチを与えることなのである。最後に、公正を期すために付け加えておくと、筆者はStrawsonの思想に一番近いものを感じた。彼は、「真の物理主義」を標榜し、「経験的」なことも物理的であると説く。そして、「非経験的」なものから「経験的」なものが創発することはありえないので、前者（要するに生物になる以前の構成要素）にも微小な「経験的」なるものがあるとする、一見汎心論的な思想を展開するが、もちろん、その「経験的」なるものは物理的なものなので、全体は物理主義に回収される。筆者は、彼のいう、無生物内の微小な「経験的」なるものも、言語上の「モノそのものであるコト」でよいと思うのだが、共感を覚えるのは、彼のいうなれば“物質分かったふう主義”批判である。どうも私たちは、「物質のことは分かっている。分からないのは心だ」というふうに思いがちだが、実は物質のこともまだまだ分かっていないのである。量子力学の成果が示すように、この思想が下手な哲学よりよほど刺激的なのは、それが次々と明かしつつある物質の実態の側から、心なり精神なりの姿がほの見えてきたことである。私たちは今一度、私たちの周りに溢れる物質の側に身を置いて、「自己」を考え直す時にあるように思える。

- 2) 鈴木啓司2020,「新たな認識論の構築 17 一意識論Ⅱ 認識論から見た相対性理論と量子力学一」,名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) Vol. 56 No. 2.
- 3) 調べてみると、プログラミング言語の分野ではすでに+0, -0の概念があるらしい。浮動小数点方式に関わるもので、もっぱら表記上の利便性を目指し哲学的深みがあるようには見えないが、筆者はそちらの方面にはまったく不案内なので、ここで論じている+0, -0は、筆者が自由気ままに考えた創作物だとお含みおきたい。
- 4) 鈴木啓司2014,「新たな認識論の構築 12 一認識論から見た無限一」,名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) Vol. 26 No. 1 p. 66.
- 5) このあたりのことを少し数学的な言い回しでなぞらえると、-0, +0は複素平面上の除去可能特異点に当たると見なす。関数の正則性(複素微分可能, 換言すれば、関数の連続性を保ち定義域を拡げるための要件。この拡げる作業を解析接続という)を確保するために、定義できない特異点を排除する必要があるが、その時、特異点の右か左か定義域が確立されている片側からのみ極限値に迫る手法がある。これを片側極限という(通常の極限はどちらからでも迫れる)。-0, +0は、この片側極限の意味を具体的に表した数と見てよいかもしれない。階段は急角度で曲がるのではなく、視線の回転という丸みを帯びているのである。
- 6) この無現階段を下りきるというイメージは、自然数論の無矛盾性の証明などに使われる超限帰納法を思い起こさせる。下から数え上げるという普通の数学的帰納法では、仮無限レベルに問題をとどめている限りは有効だが、実無限が相手となると永久に終了しないことになる。そこで超限帰納法では、ある超限順序数(無限を表す数)から下に数え下り底まで行き、それまでに矛盾がなければ論全体に矛盾がないとする論法である。ここには、無限の彼方から無限階段を下りきるといふ、「無限」を出発点に設定する発想があるが、それを可能にするのは、暗に想定された超越的第三者の視点であろう。
- 7) 鈴木啓司2017,「新たな認識論の構築 14 一集合論を超えて 境界についての認識論的考察一」,名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) Vol. 53 No. 2.
- 8) 鈴木啓司2018,「新たな認識論の構築 15 一数学概念をモノ化する 複素平面の認識論的解釈一」, Vol.

54 No. 2.

- 9) これについても数学的な説明を一言付け加えておくと、リーマン予想を考えるうえで重要な、オイラー、リーマンが確立した関数等式というものがある。リーマンの形で表すと、 $\zeta(s) = \zeta(1-s)$ ということになる。これは中間値 $1/2$ を中心に両項が複素平面上で点対称の位置にあることを意味しているが、筆者には、2視線交叉から生まれる1視線、「2から1を作る」原理を映し出しているように見えるのである。
- 10) 鈴木啓司2019, 「新たな認識論理の構築 16 一意識論 I 認識論から見た数の生成一」, 名古屋学院大学論集(人文・自然科学篇) Vol. 55 No. 2.
- 11) 森田真生, 『数学する身体』, 新潮社, 2015. pp. 135-137.
- 12) V. S. ラマチャンドラン, 『脳のなかの天使』, 山下篤子訳, 角川書店, 2014.
- 13) 同書, p. 182.
- 14) Jean-Paul Sartre, *L'Être et le néant*, Gallimard, 1972. 日本版 ジャン＝ポール・サルトル, 『存在と無』 I～III, 松波信三郎訳, ちくま学芸文庫, 2007～2008.

参考文献

- 木内敬, 『ビジュアル・リーマン予想入門』, 技術評論社, 2020.
小山信也, 『数学の力 一高校数学で読みとくリーマン予想一』, 日経サイエンス社, 2020.